

# 春燈

2月号

日本美術家協会 日本美術家協会 日本美術家協会

## 櫻桃子の句

狐火小さし親なし子狐がともし

自註現代俳句シリーズI期

『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

自註に、狂言の一つ「釣狐」の一文があるのみ。相次いで親を失った子狐が、独りで点す火のなんと小さくて暗いこと。この子狐、畏に掛かることなく、無事帰り得たのであろうか。家の中では温もりのある黄色い、明るい火を点し続けてほしいものと願わずにはいられない。師の境遇を知る春燈人であれば、涙する一句であろう。余情、余韻の残る句として、愛誦する句の一つである。

松本峰春

# 櫻桃子の句

## 冬の薔薇さだかならねど恋ならむ

『風色』昭和四十八年

第二次世界大戦敗戦後の混乱期二十歳代、横浜国立大学の学生の頃の句と思われる。恋することの羞い、戸惑い、そして期待。誰もが生きること、一杯の時代にも心弾む青春があった。哀切に貧を詠い、望郷を母を詠う。なかでも不幸な星の下に生まれた子への愛、子の不運を訴える一句一句は神への祈りにも思える。句集『風色』のなかでは初々しく仄明るい作品と思う。

小宮 淳子

主宰の句

# 西ヶ原日記(3)

鈴木榮子

冬の雁弱りもぞするくさぐさや

東京弁の女しやかしやか白朮詣

台北の派手な賀状の聯に似て

年 新 た 漢 は 凜 と を み な 淑  
占 は サ タ ン の 類 か 初 ト ラ ン プ  
秤 ぞ め 均 等 の こ と 愛 に な し  
初 髪 の 予 約 の こ と を 習 ひ と す  
檸 檬 入 り ホ ッ ト 蜂 蜜 事 務 始  
初 鏡 シ ャ ル ウ イ ダ ン ス 写 し け り  
隠 し 好 き の 魔 女 お て ミ ト ン ま た 隠 す

川崎北から南から

小島 禾 汀

桂郎の地つづきの郷木守柿  
登高や遙か新宿副都心  
枇杷咲くや昔のままの日向道  
阿夫利嶺の風のここまで残る柿  
妻ともに歩む落葉の音おなじ  
疎開児の声いまもなほ柿すだれ  
冬の日を余す板碑の男神  
句を拾ふ師走をひろふ多摩郡  
北みなみ結ぶ師走の南武線  
忘年や大師・六郷・二子橋

沿線

卯木堯子

江の電の沿線鴉いろすすきかな  
あらまほし猫じやらしほどの愛の鞭  
松原の松の百態秋の声  
文鎮の持ち重り良き白露かな  
聖堂の小声強ひらる秋扇  
マルメロの幹の髓まで雨通る  
眼の病ひ神に委ねしいとどかな  
誤解にてこほろぎの子を殺めけり  
椋鳥の歩は母に似て吾も似る  
夫と子に声使ひ分く夜の鹿

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 櫻井白扇

古利根に目立ちたがりやの紅葉かな  
笹鳴やあま味効かせる塩加減  
榛の木に冬日の隠れ遊びかな  
大利根のもつとも細き冬至かな  
大年やだだをこねたる小抽出し

○ 諸岡孝子

鱻鱻の風に刺されて反りにけり  
空気にも濃き味ありぬ鱻鱻干す  
鱻鱻干す暁天の凍て打返し  
吊されて鱻鱻の反り寒落暉  
鱻鱻干し脇街道の枯ふかし

○ 本多遊方

山茶花やさみしくはなき距離をおき  
短日や買ふ礼服の一揃へ  
影のごと八手の花の隣り合ふ  
夕映えや水のしたたる鴨の嘴  
合挽きの肉練りつづく冬の夜

○ 太田佳代子

臘八会愛車磨いてゐたりけり  
煉炭が自殺の道具バソコン閉づ  
雅楽師の笙があたれる火鉢かな  
縁起物あれこれ並べ年暮るる  
除夜の僧電気バリカン充電す



# 春燈の句

鈴木 榮子選



草鞋編み暫し翹はむ小春風

兵庫 伊達 荷声

亀山てふ昔難所や秋時雨

台北 林 雪江

耳奥にいまも残れる「石焼芋」

丹精のカトレアの花数多き

われと妻の好みは一つ牡蠣雑炊

残菊や台湾秘史を語る人

亡父得意の頬冠なり吾もまた

秋惜しむ川近く住み河畔愛す

地震去りて聞き澄ます心音御神渡り

台北 呉 文宗

落花生からりと腰のくびれけり

東京 平野加代子

海鼠噛む老残の呂律くくみつつ

夫に買ふソムリエ」ナイフ十二月

喪の席に集ふ勤労感謝の日

古スタインウェイに楽聖の霊聖夜来る

極月や階段下りてたたら踏む

桂落葉白鳳の香を舞はせけり

冬の台風逸れて電話の長話

台北 范 友佳女

藁塚の個々に傾ぎて孤のかげり

東京 久保 久子

墓原はすすき原なる風渉る

ゆく秋や生絹の風の北近江

来ぬバスに老の足踏み冬隣

浮寝鳥ときに孤独をよしとして

鳥肌立つ整形美女のコンテスト

数へ日や母の手ずれの鯨尺

# 余言

鈴木 榮子

山茶花やさみしくはなき距離をおき 太田佳代子

さみしくはなき距離というのは中々信頼性の十全な距離である。よくそのことを詩に持ち込んで詠んだと思った。

遠い近いではない。いつて見れば遠近に関係なくお互のテリトリーの中にいて寧らげる距離なのだ。幸せを絵に書いたようではなくこの平安な幸せを心に感謝しているのだ。

探す書の在庫切れとや朴落葉 佐渡谷秀一

本も読みたいとなると近所の二、三軒から丸善でもブックセンターでも探す、本というものは新刊で出たとき買っておかないと後では品切れ、在庫切れで手に入らないことが多い。本に限らず必要なもの欲しいものが手に入らないときはストレスの最たるものであろう。

透明な詩を読む如冬の滝 神田 恵琳

滝というと那智の滝が眼に浮かぶ。あの長さ、音、白い透明な水飴のような真白な水が水音を立てて落下する。詩を読む如しは作者の感じた心で、作者は僧籍の方なのでおのずと滝に対する畏敬の念が詩という形にもなって口を突いて出たのであろう。作者でなくても滝の荘厳さは思わず敵そかな気持ちとなり、その敬虔な気持ちを透明な詩を読む如しといったのであろう。

京都着これからが旅小六月 山口 地翠

先ず京都へ到着した。さてこれからが旅である。京都は東西南北山々に囲まれ、四季いづれのシーズンも旅を楽しむことが出来る。どこへいこう。今回は少し足をのぼして北山方面へ行こうか。バスを一番遠くまで乗って見よう。駅のそばでリーズナブルなシティホテルはどこか、飛び込みでも結構宿もとれた。少し休んで手荷物を纏め出掛けようなどと考える。

京都はどこへ行っても見るべきところはあるが、その季節との組み合わせによる。北山へ行くもよし、東山から琵琶湖へ下るのもよし、京都散策は限りがないものである。

春は御室の桜、夏は貴船、秋は神護寺、高山寺、冬は雪の常照光寺を尋ねて見たいものである。